

小型漁船漁具漁法改良試験

担当者	漁業課長	田名部 政 春
	技 師	富 永 武 治
	”	沢 田 兼 造
	”	赤 羽 光 秋

目 的

例年本県沿岸に來遊する、ブリ、マグロ、イワシ、サバ等を対象として漁具、漁法改良試験を実施し、これ等資源の効率の利用を図って小型漁船の所得増強をはかる。

(1) 游敷網漁業試験

(イ) 試験の方法

1. 試 船 (備船)
金徳丸 4.11 , D37PS 栄昭丸 4.89 , D35PS
2. 乗組員 船長 2名, 機関長 2名, 外 4名, 計 8名
3. 試験期間 昭和41年8月23日~全年9月11日
4. 試験海域 八戸前沖~三陸沖
5. 漁 具 浮敷網 1ヶ統

(ロ) 試験の経過

前年度に引続き八戸市遠海漁協組所属船金徳丸(網船)外1隻(曳船)を備船し、8月23日より、9月11日までの20日間浮敷網漁業試験を実施したが、調査期間中における出漁日数は14回、操業回数31回(投網回数、13回、集魚回数18回)であった。

漁期間中における魚種別漁獲高は片口イワシ225Kg、ピンサバ63Kg(体長12cm~15cm)小サバ40Kg(体長18cm~21cm)マイワシ5Kg、スルメイカ2Kg、イナダ1.5Kg豆アジ5~6尾であった。

IV 調査結果及び考察

本年度の調査は前記のとおり、不調に終わったが、本年は漁具の点においても又操業技術の点においても相当の自信をもって調査に当たったにかゝらず本漁法が本県沿岸に來遊するアジ、サバ、イワシ類を対象として適当な漁具、漁法であるかどうか疑念が持たれた。

過去3ヶ年にわたる本試験の結果として3ヶ年共に不成績であったこともその1つであるが、昨年(40年度)八戸市の当業船2隻が本漁業を導入し操業したが何れも不成功に終わった。

本年度調査期間中における漁況面からみると調査海域には魚族反応が随所に見られたがこれを集魚した場合浮上して来るのが殆んど片口イワシ、ピンサバで、中サバは前年も本年も殆んど見られなかった。片口イワシ、ピンサバが漁獲対象となったとしてもこれ等の魚種は市場価格が安く相当大

量の水揚がない限り採算がとれないと思われる。

将来期待が持たれる中サバが大量に沿岸に来遊する年があるので、この場合には、本漁法が有効に利用できるのではないかと、今後時期と魚群の来遊状況により操業を行えば本県の小型船の漁具、漁法として不適當なものではないと考えられる。

(2) ブリ，マグロ流網漁業試験

(イ) 試験の方法

1. 試験船 (備船) 松運丸 433 D35PS
 2. 乗組員 船長以下2名
 3. 試験期間 昭和41年6月25日～同年8月10日
 4. 試験海域 鯨ヶ沢前沖～久六島附近海域
 5. 漁具 ブリ流網 26反
- 内訳
- | | | |
|------|----------|------------------|
| アミラン | 210D/9本 | 115mm(3.8寸)8反 |
| 〃 | 〃 | 109mm(3.6寸)8反 |
| 〃 | 210D/12本 | 151.5mm(5.0寸)10反 |

(ロ) 試験の経過

本調査は昭和39年度よりの継続調査として本年度は深浦港より松運丸を備船13回操業を実施したが、ブリ、マグロの漁獲は全く見られなかった。

本年は過去2ケ年間の主漁場であった鯨ヶ沢以北の沿岸の外に大戸瀬崎から久六島海域まで広範囲に亘って操業を試みたが、漁獲は僅かシイラ2尾、ネズミザメ仔魚1尾、1.8尾、その他片口イワシ、中羽イワシ若干の漁獲より見られなかった。

(ハ) 調査結果

本年不調の原因の一つとして考えられることは4月～8月にかけて沿岸水域の水温が平年よりかなり低目に経過したため、ブリ、マグロの漁期の遅れが目立ったことで例年7月に入ると沿岸地域の随所に見られるナムラも本年は殆んど見られなかった。

然し7月下旬に至り松(鱧作崎以南)の大型定置に20～30Kのマグロが1日26Tと大量の水揚があった。一方鱧作崎以北海域の大型定置には余り目立った。漁が見られずマグロの来遊が鱧作崎を中心として南偏傾向がはれ、地域的に大きな漁獲差が見られたようである。

本年は以上のような変則的な海況に災され、ブリ、マグロ流網漁業試験も全くの不調に終わった。

(ニ) 考察

過去3ケ年間の本漁業試験を省みて、今こゝに本漁業の企業性について結論は出せないが初年度は僅か16反の網でメジマグロ1.6尾40.1K大マグロ2.5尾62.6.8Kブリ、2.2尾50.2K、金額にして30万余円の水揚を見、1躍小型漁船の漁業として注目され、地元にて6隻の着業船が見られたのを始め北海道、及び県内各地から続々照会があった程だが、第2年度は初年度の好漁場に大型定置及び底曳網が設置されたため漁場が制約され、漁場が遠くなったため、ブリ8尾、29.9kg、メジマグロ3尾11.6kg程度の漁獲より見られなかった。

第3年度は第2年度より更に低長となり試験期間中シイラ2尾、仔モーカ1尾、ソーダカツオ

18尾で、ブリ、マグロの漁獲が全く見られなかった。

以上の状況から判断してみても

- ① ブリ、マグロの接岸来游量はその年により大きな変動がある。
- ② 片ロイワシの来游量がブリ、マグロの潤游を大きく支配している
等であるが漁具、漁法上から考えて
- ③ 漁具は化学繊維の発達に伴い出来るだけ細く強いものを使用する。
- ④ ブリ、マグロ両方を漁獲の対象としているので将来3枚網の研究を進めて行く必要がある。
(例えば中網を210D/6~9本3寸~4寸と外網を210b/10本~15本、5寸~尺目とする)
- ⑤ 漁法としては昼間において魚群のナムラ等を探索し夜の流網漁場を大体見当を付けておく。又他船から昼間のナムラの発見場所等を聞いておく
- ⑥ マグロ類を対象とした流網の漁具、漁法も研究して行く必要がある。

(参考) 小型マグロ延縄漁具仕様 (1鉢分)

1. 幹	縄	2.25匁	150間
2. 枝	縄	3匁	5〃
3. セキやま		60匁麻セキ	2〃
4. 釣元ワイヤー		2.9×7	2〃
5. 浮子縄		2匁	6〃 (8間) 枝縄6本の内2本を8間にする。
6. 枝縄間隔			25〃
7. 浮子玉			7寸
8. 釣鉤			2.7寸
9. 釣鉤数			6本